ヘーゲルのギリシア哲学論

山口誠一著

創文社

山口　誠一（やまぐち・せいいち）
1953年東京生まれ．1978年東京大学文学部哲学科を卒業．1979年より東京都立大学大学院，法政大学助教授を経て，マクシミリアン・ルートヴィヒ大学哲学部およびボーフム・ルール大学付属ヘーゲル・アルヒーフの客員研究員．現在，法政大学教授，“Jahrbuch für Hegelforschung”（H・シュナイダー編）国際顧問．
〔主要業績〕『ヘーゲル哲学の根源―精神現象学の問いの解明』，法政大学出版局，1989年．『ヘーゲル事典』（共編著）弘文堂，1992年．『ネオプラトニカ―新プラトン主義の影響史』（共編著）昭和堂，1998年．H-G・ガダマー『ヘーゲルの弁証法―六篇の解釈学的研究』（共訳）未来社，1992年．Hegel-Forschung in Japan (1878～1990). In: H. Schneider (Hrsg.), “Jahrbuch für Hegelforschung”. 1/95, Academia Verlag, 1995.

〔ヘーゲルのギリシア哲学論〕

一九九八年二月二五日　第一刷印刷
一九九八年三月二八日　第一刷発行

著者　山口誠一
発行者　久保井浩俊
印刷者　山田隆

発行所　株式会社　創文社
〒一〇二―〇〇八三
東京都千代田区麹町二―六―七
電話〇三―三二六三―七一〇一
振替〇〇一二〇―〇―九二四七二

著者との申し合せにより検印省略

精興社印刷・鈴木製本

ISBN4-423-17102-3　Printed in Japan

凡　例

一、フェリクス・マイナー社から現在刊行中のアカデミー版ヘーゲル全集は、*GW* と略記しズーアカンプ社版ヘーゲル著作集は、*W* と略記し、フリードリヒ・フロムマン社版ヘーゲル著作集は、*SW* と略記し、その後に巻数ならびに頁数を記した。その他の主要な引用略号も、次のようである。

Phän.: G. W. F. Hegel: *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. v. Wessels, H.-F. u. Clairmont, H., Hamburg, 1988.

VGP: G. W. F. Hegel: *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*. Hrsg. v. Garniron, P. u. Jaeschke, W., Hamburg. Teil 1 (1994); Teil 2 (1996); Teil 3 (1989); Teil 4 (1986).

M 1: *G. W. F. Hegels Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*. Hrsg. v. Michelet, Dr. Karl Ludwig, 3 Bde., 1833ff. In: *G. W. F. Hegels Werke. Vollständige Ausgabe durch einen Verein von Freunden des Verewigten*. Verlag von Duncker und Humblot, 13.・14.・15. Bd., Berlin, 1833ff.（ただし、頁数は、前掲 *SW* 所収の版による。）

*G*1・2: *G. W. F. Hegel Nachschriften: Geschichte der Philosophie. Kollegnachschrift Berlin*, W.-S. 1825/26, von Griesheim, Karl Gustav v., Heft 1・2.［Ms. germ. qu. 540・541］

二、原文の隔字体は、本書では傍点を付して表示する。

三、著者自身による本文中での註記は、〔　〕で示した。

四、本書で、ヘーゲル用語を検索するに際しては、加藤尚武氏の責任で、石川伊織・神山伸弘両氏が構築・管理している

ヘーゲル・テキストデータベース（Ver. 4）を使用した。

五、本書でヘーゲル日本語文献を検索するに際しては、著者が構築しているヘーゲル日本語文献目録データベースを使用した。

六、本書で最近の関連哲学文献を検索するに際しては、文部省学術情報センターのデータベースサービス（NACSIS-IR）を、法政大学総合情報センター経由のインターネットで一九九六年度文部省科学研究費補助金の交付を受けて利用した。

七、ヘーゲルがベルリン大学で行った講義の聴講者筆記録を引用するに際しては、ベルリン州立プロイセン文化財図書館草稿部より許可を頂戴した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

凡　例……v
序　論……三
第一節　ヘーゲル研究の難局……三
第二節　新しい人文古典主義とヘーゲル……六
第三節　ヘーゲルの思弁的解釈の広がり……一〇

第Ⅰ篇　ヘーゲル研究史から見た古代ギリシア哲学問題

第一章　日本のヘーゲル研究史と古代ギリシア哲学問題……一五
第一節　日本のヘーゲル研究の過去と前途……一五
第二節　日本のヘーゲル研究史概観……一七
第三節　日本のヘーゲル研究の特質と空隙……二六
第二章　ドイツのヘーゲル研究と古代ギリシア哲学問題……二八
第一節　第二次大戦後のドイツにおけるヘーゲル研究……二八

第二節　近年の研究動向の概観……三〇
第三節　ヘーゲルの古代ギリシア論の研究管見……三五
第三章　『哲学史講義』筆記録研究の現状……五〇
第一節　ミシュレ編『哲学史講義』の問題点……五一
第二節　グリースハイムの講義筆記録……五四

第II篇　思弁哲学の源泉

第一章　『精神現象学』から『哲学史講義』へ……五九
第一節　日本の『精神現象学』研究回顧……五九
第二節　『精神現象学』研究の特質……六〇
第三節　『精神現象学』研究の空隙……六七
第二章　ヘーゲルと観想の幸福……七九
第一節　幸福観をめぐるヘーゲルとアリストテレスの相違……七九
第二節　理性と思考対象との同一性……八一
第三節　徳の概念をめぐるヘーゲルとアリストテレスとの相違……八七
第四節　絶対知と幸福……八九

第三章　理性をめぐって……九六
第一節　推論の中項としての理性……九六
第二節　観念論の現象学的規定……一〇〇
第三節　カテゴリーについて……一〇四
第四章　理性の根源……一一三
第一節　「アリストテレス講義」の特質……一一三
第二節　ヌースの接触と推論の中項……一一七
第五章　ヘーゲル元素論と推論の中項――『ティマイオス』篇三二a―b解釈への註釈――……一二四
第一節　自然の推論と比関係……一二四
第二節　ヘーゲルのイデア理解……一二八
第三節　四元素間の四項推論……一三二
第四節　「イェーナ自然哲学」の元素論……一三四
第六章　ソクラテスの彫塑的問答法……一四一
序……一四一
第一節　ソクラテスの問答の根源……一四三
第二節　ヘーゲルのソクラテス解釈……一四五

第三節　彫塑的問答法の特質……一四八

第Ⅲ篇　ヘーゲルの新プラトン主義理解

第一章　若きヘーゲルにおける概念と全一論……一五五
序……一五五
第一節　ヘーゲルの絶対概念の独自性……一五六
第二節　若きヘーゲルの概念……一五八
第三節　「運命草稿」の全一論……一六二
第四節　ヘーゲルの全一論の淵源……一六六
第二章　ヘーゲルと新プラトン主義の伝統……一七五
第一節　ヘーゲルの中世哲学理解の問題点……一七五
第二節　中世新プラトン主義の伝統……一七七
第三節　ヘーゲルの新プラトン主義理解の問題点……一八四
第三章　ヘーゲルから見た新プラトン主義……一八八
第一節　新プラトン主義の総合性……一八八
第二節　発出論の原型……一九一

第三節　プロクロスの三位一体論……一九四
第四章　純粋概念の新プラトン主義的根源――『精神現象学』序言の一節への註釈――……二〇三
序……二〇三
第一節　概念の自己運動と哲学史との関係……二〇三
第二節　ヘーゲルの新プラトン主義理解の基本点……二〇五
第三節　ヘーゲル哲学の哲学史的位置……二二
あとがき……二八
欧文要旨……1
固有名・事項索引……11
主要参考文献一覧……25
資料一　ヘーゲル『霊魂論』翻訳断片……38
資料二　ヘーゲル「アリストテレス講義」――グリースハイムの未公刊筆記録（一八二五／二六）から――……48
資料三　ベルリン期ヘーゲル未公刊講義筆記録一覧……81
資料四　ヘーゲル―古代ギリシア関係研究文献目録（一八三九～一九九六）……86
資料五　『精神現象学』日本語文献目録（一九二三～九五）……108

ヘーゲルのギリシア哲学論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　論

本書は、ヘーゲルの古代ギリシア哲学解釈を通して、ヘーゲル哲学の根源を解明することを主要な課題とする。したがって、本書は、哲学史研究の観点からは、日本のヘーゲル研究において、ヘーゲル―古代ギリシア哲学関係に関する研究が殆どなされていない空隙を補塡するという意味をなるほど持ってはいる。だが、たんなる補塡に止まることなく、国内外のヘーゲル研究全体を眺望しながら、その研究全体において閑却され、今述べた空隙において暗示されているヘーゲル像を、まさに今、存在するヘーゲルとして再生させることも目指している。

第一節　ヘーゲル研究の難局

それにしても、ヘーゲル哲学の根源は、いまだ完全には突き止められていない。むしろ、その根源の探究は、深刻な難局に遭遇し、迷路にはいりかけている。その迷路にはいりこむことを避けるために、まずなすべきことは、ヘーゲルが哲学の源泉とも言うべき古代ギリシア哲学摂取を行っていることの背景を解明することである。そして、その解明によって、ヘーゲルの全体像の隠された面を照射することである。

ところで、その照射を妨げる第一の難局は、ヘーゲルを、近代哲学の枠組の中で、さらにもっぱらドイツ観念論

の枠組の中で理解しようとする見方である。なるほど、ドイツ観念論なる枠組は、そもそもそれほど堅固なものではない。しかし、その見方は、結果として、古代ギリシア哲学がヘーゲルの思索の中で占める位置を見えなくしている。たとえば、ヘーゲルを彼の先行者から理解しようとする場合、せいぜいカントから理解することで、大方十分であるとされることになる。この傾向も、とりわけて日本では、一面的に増幅されている。そして、ヘーゲルの思弁哲学理解の出発点としても、もっぱらカントだけを考えてしまう傾向が今日に到るまで続いている。[1]

この見方からすると、ヘーゲルの古代ギリシア哲学摂取は、カント摂取に比して付随的なものとなる。逆に言えば、ヘーゲルの人文古典主義的側面が、つまり、古代ギリシア哲学を、その源泉の一つとするというカント哲学にはない思弁的側面が、いわゆるドイツ観念論哲学の枠組の中で、事実上盲点となってしまっている。この盲点を克服するために、ヘーゲルを、ドイツの人文主義[2]の流れの中にも実質的に位置づけなければならない。

さらに、第二の難局として挙げるべきは、ヘーゲルのマルクス的解釈であり、その解釈によれば、ヘーゲル弁証法は、マルクス弁証法の先行形態だということになる。ヘーゲルは、弁証法の側面から、もっぱら、批判的継承者マルクスとの関係において解釈されることになる。そして、この解釈にあってもヘーゲルの古代ギリシア哲学摂取は、マルクスとの関係に比して付随的なものとなる。

しかし、それ以上に問題とすべきは、ヘーゲル研究そして、ヘーゲル自身の内部に隠されている第三および第四の難局なのである。第三の障害とは、とりわけヘーゲルの古代ギリシア哲学摂取を解明するための主要な資料である『哲学史講義』の現行版テキストが、文献学的にきわめて不十分なものであり、ヘーゲルの古代ギリシア哲学摂取を精確に伝えていないことを意味する。とりわけ『ヘーゲル哲学史講義』の現行ミシュレ版は、きわめて不完全である。また、ミシュレ版を改善しているイェシュケ・ガルニロン版も、一八二五／二六年の講義筆記録に限定し

て、しかも、グリースハイムの筆記録を中心にしながらも、他の同時期の筆記録を明示することなく、大幅に取り入れている。その点で決定版たりえないことは、本書の主要課題の解明にとって大きな障害となっている。

第四の難局とは、そもそもヘーゲルの哲学史理解が、実は未完成なものであり、一貫した哲学史理解になっていないことにある。その原因は、ヘーゲルの中世哲学理解がきわめて不十分であるがゆえに、古代ギリシア哲学の最後の輝きと通常言われる新プラトン主義の伝統を、中世を経由して、近世そしてヘーゲルの時代にまで到る一貫した流れとして叙述できていないことにある。つまり、ヘーゲルの哲学史理解そのものが、古代ギリシアと近世哲学に分断されている。

この原因の一端は、ヘーゲル生存当時の哲学史研究の水準にもあるであろう。というのも、ヘーゲルの時代は、哲学史研究がまだ草創期にあり、古代ギリシア哲学から近世の哲学までの精確な流れが解明されていなかったがゆえに、ヘーゲル自身が己れの哲学を哲学史の流れの中に正確に位置づけることもできていないからである。中世は、学問の発展にとっては暗黒の時代で、ルネサンス以降の近世は、古代の諸学問が復興した時代であるという図式が通用していたのである。とりわけ、新プラトン主義の流れが、アカデメイア、ギリシア教父、そしてアラビア・アリストテレス主義、ビザンティン神学や人文主義、西方ゲルマン中心の中世哲学へと多面的に進展していった経緯が殆ど未解明であったことは、重大であった。また、今日に到るまで、ヘーゲルも含めたヨーロッパと日本の哲学史研究が、著しく西方ゲルマン中心になっていることも重大である。

こうして、新プラトン主義の伝統とヘーゲルの関係を問うということは、ヘーゲルの思索内部の空隙を問うということになる。むろん、この問いは、たんに空隙を埋めることに尽きるのではない。むしろ、国内外のヘーゲル研究全体を眺望しながら、その研究全体において閑却されているヘーゲル像を、まさに今存在するヘーゲルとして再

生させることを最終的に目指している。

しかも、最初に述べたように、ヘーゲルの古代ギリシア哲学論に関する国外の研究には、ある程度の蓄積はあるが、まだ基本書と見なされる研究はない。また、日本では、そもそも研究の蓄積がまったくないのである。したがって、著者は、最初からすべてを自力で遂行しなければならなかった。

著者は、以上のような困難を克服する努力をしながら、アリストテレス論を頂点に据えたヘーゲルの古代ギリシア哲学論のうちに、ヘーゲル哲学の根源を目撃しようとした。前著『ヘーゲル哲学の根源』（一九八九）で、アリストテレスの理性論やカントの概念論も参照しながら、絶対概念まで行き着いた。[3] つまり、この絶対概念の問題の源泉は、近世哲学においてはカントのうちに、そして古代哲学においては、アリストテレスさらには新プラトン主義のうちに見出すことができる。この両者を複眼的に捉えることがなければ、ヘーゲル哲学の根源を、概念のうちに見出すことはできない。しかも、このアリストテレスが、中世を経由して、ルネサンスの新プラトン主義的人文古典主義そしてドイツのやはり新プラトン主義的人文古典主義を背景としていることを理解しなければ、近世の伝統であるカントの批判哲学とも正確にかつアクチュアルに関連づけることはできない。

第二節　新しい人文古典主義とヘーゲル

このようにして、ヘーゲルにおける古代ギリシア哲学摂取を解明する主調低音は、さらに〈ヘーゲルはどこにいるのか？〉というアクチュアルな問いに集約される。また、それに対する解答の試みが今、必要とされている。換言するならば、その試みは、今存在するヘーゲルを、これまでの国内外のヘーゲル研究動向を踏まえながら、ヘー

ゲルの著書、自筆草稿、講義筆記録のうちに求めることでもある。より具体的には、新しい人文古典主義的ヘーゲル像を、最先端の資料研究を踏まえ、さらにみずから遂行しながら解明することである。

人文という言葉は、たしかに、日本では、書籍の分類や、学科目の分類に使われ、哲学も人文科学に分類される。しかも、人文科学が、自然科学や社会科学と同様に専門知として理解される場合すらある。それどころか、現今の大学改革の中で、これまでの専門教育と教養教育の垣根が取り払われつつ、教養教育を縮小する傾向も出てきている。しかも、教養教育においても、一般教育の人文・社会・自然という区分が、取り払われつつある。しかし、その動向には、本来の人文知さらには教養知に背きかねない場合もある。なぜならば、大学とは、ヨーロッパ中世以来、そしてヘーゲルが教えたベルリン大学も、相互に孤立した専門知の集合体であるより前に、むしろ個人を陶冶する教養知の府であり、統一的な知の府であったからである。この知の府での統一的な知とは、当然にも、現今の「教養知」と「専門知」を統合する深い意味での教養知なのである。その際、諸学問が、人文・社会・自然の各分野に、平等に配分されるわけでもない。むしろ、人文知とは、狭義の教養知そのものとして、社会知や自然知の原理となるべきものだからである。

そもそも人文古典主義とは、形骸化したスコラ哲学の神中心の立場に対しては、人間中心の立場であり、啓蒙主義的近代中心主義に対しては、古典尊重の立場である。そして、二〇世紀においては、科学を物神化する立場や、あるいはイデオロギー中心の立場に対して、総じて個人の内面的精神中心の立場である。さらには人文古典主義的西洋哲学研究は、古代ギリシア以来の古典を研究することを通して、自己を陶冶し現代精神そのものを、個人の内面から問う。ヘーゲル研究においては、その立場は、イデオロギー中心の立場や、理性を科学に還元する啓蒙主義に反対する古典的精神の尊重として存在すべきである。したがって、人文古典主義とは、時代に応じて変化する、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com